

ヨゼフ会便り



発行者 ヨゼフ会 横浜市中区山手町44番地 カトリック山手教会内

第56号 2025年8月16日発行

『なじむ、なじんでくる。』



横浜教区副事務局長

牧山 善彦

昨年5月、約7年ぶりに山手の丘に戻ってきました。新司祭として1年間過ごした司教館、また、昔から

慣れ親しんだ地元・横浜に帰ってくるというのは不思議な感覚ですが、ありがたさも感じています。だんだんと今の生活にも慣れてきて、復活祭以降は山手教会の主日のミサをお手伝いする機会も増えてきました。特定の小教区の司牧を担当していない自分にとって、これまで当たり前のように感じていた「主の日を共同体の典礼によって祝う」よろこびや、豊かさを再確認する時にもなっています。



焼津聖堂 内陣から

現在、司祭生活10年目の自分。司教館に居る期間を除くと、磯子教会の小教区管理者として赴任した9ヵ月のほかは、静岡教会に2年数ヵ月、焼津教会に約4年と、ほとんどを静岡県中部で過ごしてき

ました。最初は気付かなかったのですが、自分はその土地に住み慣れると方言や言い回しがうつる癖があるようです。「子ども」が「子どもっち」、「～だから」を「だもんで」などと、意識せず口走っているのを指摘され、そのうち指摘もされなくなったとき、その土地と人となじんできたなあと気付かされます。また、堅信式などの折に司教様をお乗せして車で移動する際、初めてどうか、新司祭の際に1度行ったきりの場所が多いので、必ずカーナビを入れ、また、事前にルートを確認して向かいます。ですが、かつて赴任した地域に関しては特に気にせずに車を走らせているのに気付いたとき、その土地自体にもなじんでいたのだと思われたこともありました。

なじみ深いといえば、自分は2017年から静岡県裾野市にある不二聖心女子学院にチャプレン(宗教主事)として関わっています。自分自身はカトリック学校を経験していませんが、横浜教区の高中生大会や召命錬成会を通じて、すでに不二聖心という場所へのなじみはありました。実際に学院に赴く機会は年20回程度ですが、宗教行事、生徒や保護者の勉強会、その他学院内で教職員の方々や生徒たちと顔を合わせるなかで、土地だけでなく人とのつながりとしても不思議となじんできたように思います。

その不二聖心女子学院の敷地内にある山の家をお借りして、横浜教区では毎年、召命錬成会を開催しています。2009年に大学生サブリーダーとして関わって以降、神学生、新司祭、そして担当司祭と、かれこれ15年を超えて関わり続けています。自分が神学生の頃に参加してくれた子たちの多くは大学

生や社会人となりましたが、時折顔を合わせる機会があると、不思議と錬成会に来てくれた当時の感覚に戻る部分があります。スタッフと参加者という立場ですらそう感じるのですから、参加してくれた子たちの間では尚更そうなのでしょう。他の合宿もそうかもしれませんが、召命錬成会は3泊4日と長丁場な分、日を重ねるなかで同じ場を囲むことが自然に感じられる瞬間が生まれてくる気がします。これもまた、なじむ体験のひとつと言えるのでしょうか。



不二聖心聖堂棟と校舎

他方、なじみの人や場所を大切にしつつ、そこだけに留まらないことも必要だという思いもあります。横浜に戻ってきて以降、ひよんなきっかけで早押しクイズという趣味ができました。一緒にクイズの場を囲む人のほとんどは、教会にも司祭にもなじみのない人です。自分がカトリックの司祭であることを知っているクイズ仲間のなかには、キリスト教や司祭という存在に興味を持って話しかけてくれたり、キリスト教に関連する作問の裏取りも兼ねて質問したりする方もいらっしゃいます。いざ話してみると「知らなかった」「初めて聞いた」という反応も多く、自分としてはなじみすぎて当たり前のように感じている教会のことも、なじみのない人にとっては新鮮に映るのだと実感させられます。自分自身はまだまだクイズの場になじんでいる途中ですが、そうした出会いを通して少しでもキリスト教や教会に対する

取っ掛かりが生まれてくれたらいいなあと思います。

では、最後にクイズをひとつ。「御父、御子、聖霊のうち、人といわゆる顔なじみになられた方はどなたでしょう？」神が人となり、人の世になじまれた。目に見える様々な関わりと、なじむ体験を通して、そんな神さまの営みのことも思い巡らせることができたら面白いなあと思う今日この頃です。

Ⅱ 風は思いのままに

工藤 誠一



4月26日、27日は私が校長をしている聖光学院の学園祭であった。両日で3万人を超える来校者があり、大盛況のうちに学

園祭を終えることができた。今年は1月から3月終わりまでTBS日曜劇場「御上先生」というドラマが放送され、わが校はそのロケ地であった。このことが劇的な来場者数の増加につながったようだ。聖地巡礼ならぬロケ地巡礼と称する現象のようである。主演男優は松坂桃李さん、女優は吉岡里帆さんであった。

私自身はロケの際につかの間のぞいただけであったが、ロケそのものは昨年10月後半から日曜・祝日、冬休みと年明けまで続き、朝6時から遅い時は夜の11時近くまで行われたようである。教室、職員室、廊下、校庭はもちろんのこと最後は講堂まで使用してプレゼン大会などの撮影も行われた。毎回、教職員に始まり生徒、保護者あるいは生徒の兄弟姉妹にまでエキストラ募集の声がかかった。これに応じてくれる方がどれくらいいるのかと思いきや予想を超えて応募者があったのが実情であった。先生の中には毎回のように出演してレギュラーの男優、女優さんと間違えられる方もいたくらいだ。ドラマの結末では裏口入学に絡んで理事長が逮捕されてしまうというものであった。大体の学園ドラマでは理事長は悪役になる。私も学園の理事長を兼務しているので逮捕されてしまったというところだろうか。幸

いなことに清廉潔白なので、今日も普段通りの日常生活を送っている。

学園祭自体は運営の主体は生徒である。これだけの来校者を相手にしてよく運営したと感心している。私自身、かつては在学中に、学園祭の運営委員長も務めたこともあり、いつになっても学園祭は懐かしいし、思い出も多い。

我々の世代であると、学園祭は、青春フォーク真っ盛り時代であった。『なごり雪』、『神田川』、『学生街の喫茶店』…懐かしい曲をいくつも思い出すことができる。

The answer, my friend, is blowin' in the wind

The answer is blowin' in the wind

友よ 答えは風に舞っている

答えは 風の中に舞っている

なかでもボブ・ディランの『風に吹かれて』は、当時を代表するものである。デラシネである彷徨の時代、あの時の自分はどこに？ 最近はそんな問いかけを繰り返してしまうことも多くなった。聖光学院に奉職して、いつの間にか通学路を歩むことも在校生の時代も加えると半世紀を超えてしまった。そしてそれ以上の樹齢を重ねている木々もいまは幹の直径は2メートルを越えている。中学一年生で入学した時も、また、卒業する時もこんなに長くこの木を見上げながら通学路を歩き続けるようになるとは予想しなかった。

本校は入学式に生徒が講堂に入場してくるとき、そして卒業式で講堂から退場するときにはアンジェラスの鐘を鳴らすことにしている。式辞の最後に教え子たちに私が語りかける言葉はいつも決まっている。「ぬくもりを伝える使徒となれ」である。私は教育者としての使命は「風の中に種をまく」ことだと自覚している。

ボブ・ディランの歌詞もあるが聖書のこんな箇所もある。

風は思いのままに吹く。

あなたはその音を聞くが、

それがどこから来て、

どこへ行くかを知らない。

『ヨハネ福音書』3-8



平戸 田平教会 長崎巡礼にて

Ⅱ 京都から横浜へ



遠藤 博文

皆様こんにちは。2年程前に京都河原町教会から転入して参りました遠藤博文です。主に土曜日の夜に來ています。神奈川県で

退職後、よく言えば「終活」、実のところ物見遊山で京都に7年間を過ごしました。今回は少し京都を案内しながら感じたことなどを、自己紹介を兼ねて書いていこうと思います。

・豊国（とよくに）神社

散歩の途中に豊臣秀吉ゆかりの豊国神社(往時は方広寺)を見つけた。京都国立博物館の隣である。神社前の「正面通り」を真っ直ぐ鴨川(川端通り)に向かうとあたりは六条河原と言われた場所で、この辺りはかつてキリシタンの処刑地であった。

話によると(方広寺の)大仏に向き合うように十字架を立て、52名が火あぶり処刑されたという。

1619年10月「京都(みやこ)の大殉教」である。現在、「元和キリシタン殉教の地」と刻まれた殉教碑(1994年建立)がひっそりと立っている。その後2008年、彼らを含む1603年から1639年の間の187殉教者が「ペトロ岐部と187殉教者」として列福されたことは記憶に新しい。

・耳塚

再び豊国神社の正面に戻る。小さな公園があり母子らが遊んでいる。その横に石柵に囲まれた円錐形の緑色の小山がある。説明文を読み私は思わず声を上げた。悲鳴だったかもしれない。そこには「耳塚」と書かれていた。

秀吉の家臣、大名たちは、文禄・慶長の朝鮮出兵（1592～1598）での戦功の証明として鼻や耳をそいで塩漬けにして持ち帰った。首は取り扱いが面倒なためである。その耳を集めてここに耳塚を作りその成果を顕彰としたと言う。実に野蛮な話である。1597年の築造。

そしてこの「みみきり・はなきり」は刑罰としても用いられたようである。この「耳削ぎ」という語に思い当たることがあった。



殉教碑



耳塚

・一条戻橋

他日、妻と一条通りを烏丸(からすま)通りから西へ歩いてみる。右手にカトリック西陣聖ヨゼフ教会が見えてくる。静かでこじんまりとした教会である。そして、もう少し西進するとそこは堀川に架かる一条戻橋(いちじょうもどりばし)である。この地こそ1597年1月の「日本二十六聖人」の出発地であり、耳削ぎの場所であった。

・日本二十六聖人

彼らは京都、名古屋、大坂などから集められ、一条戻橋で左耳を削がれ牛車で市中(京都・大坂・堺)引き回しの後、長崎まで一か月かけて(後ろ手に縛られて)歩かされたと言う。ひどいやり方である。豊国神社の耳塚を見つけた時感じた息苦しさが戻って来る。長崎で見た二十六聖人像(記念碑「昇天のいのり」)を思い出した。



日本二十六聖人像(長崎西坂)

・京都河原町教会

先頃お隣のホテルが改築され教会の聖堂(の屋根)がよく見えるようになった。綺麗な佇まいである。妻はここで洗礼を受けている。だが一方私にとって「耳塚」や「一条戻橋」で暗い歴史を持つ京都は、なんだか遠くなってしまった。寺や神社や魑魅魍魎だらけの街はすでに私の中では終わっている。対して横浜みなどみらい、バラの咲く公園、洋館、何より海の見える景色が今の私たちにはしっくりくるのだった。年をとったせいなのかも知れない。ともかくこうして終活の地は更新されたのである。

・(追記) 日本二十六聖人関連本

遅まきながら彼らの事に興味を持ち始めたので本を何冊か集め始めてみた。定番の聖母文庫やパウロ文庫の諸本を始め、

- 1 ルイスフロイス・結城了悟訳「日本二十六聖人殉教記」(1997)
 - 2 同・木村太郎訳「日本二十六聖人殉教記全」(昭和6)
 - 3 松田毅一監修「イエズス会日本報告集1-3」(1988)
 - 4 アビラヒロン「日本王国記」(1965)
 - 5 マイケルクーパー「通辞ロドリゲス」(1991)
 - 6 ビリオン・松崎實「日本聖人鮮血遺書(ちしおのかきおき)」(明治20)
 - 7 同・入江浩訳「現代語訳切支丹鮮血遺書」(1996)
 - 8 片岡弥吉「日本キリシタン殉教記」(昭和59)
- などである。

結城了悟さんによるとイエズス会士ルイス・フロイスの書いた報告書(1597・3)はポルトガル語版とスペイン語版の2通があるらしい。偶然が重なり両方が別経由でローマに届いたという。また、当時長崎に居たスペイン人商人アビラヒロンも書き残してい

る。この2系統、3書が各国語に翻訳され、それが明治時代にわが国に入ってきたのだろう。読み比べるといくつかの記述に重複が見られる。

一方、二十六人の最期に立ち会ったと言われるジョアン(ツジ)ロドリゲスは何か書き残していないのだろうか。「日本教会史」はあるのだが。また、フランシスコ・パシオはどうだろう。なかなか興味は尽きない。まだどこかに埋もれた一次資料があるのではないだろうか。

山積みされたこれらの本を前に、耳塚から始まった旅がまだまだ続いて行きそうな予感がするのである。(良い本や資料あったら教えてください)

¶ 西ノ島調査の思い出



青木 淳

私は長らく調査船に乗り組んできましたが、今は造船所のドックマスターという、船の出し入れを行う仕事のお誘いを受けて。

半分サラリーマン、半分船乗りの様な仕事についています。

今回は調査船時代の、特に印象的な調査をご紹介したいと思います。皆さんは西ノ島という島についてお聞きになったことはあるでしょうか。元々は小笠原群島のはるか先、周囲の陸上環境からは数百キロ以上隔たる太平洋の小さな孤島で、近年大規模な噴火を起こし、旧島を溶岩が覆い尽くしたため、完全な新島となった島です。

そのため、地質学的には島や大陸が形成されるプロセス、生物学的には植物や動物の繁殖など、ゼロから研究できる場所として世界的にも注目される島となりました。現在は人間による干渉を避けるため、上陸はもちろん、一般の船や航空機が近づくことも厳しく制限されています。

そんな特別な島に鳥類学、植物学、海洋生物、ロボット工学(探査機の制作や操作)などの専門家とNHK撮影班を乗せ、安全に調査を行えるよう運航



管理を行うのが私の仕事でした。

調査は準備からはじまり、まず船内の生物が西ノ島を汚染しないよう、船を徹底的に消毒し、小さな虫もない環境をつくります。また船の明かりが生物相に影響しないように全ての窓を塞ぎます。最後に調査機材は、微生物の付着を可能な限り防ぐため、新品のパッケージのまま搭載するか、厳重に消毒して梱包します。

調査隊のメンバーは第一線の研究者の中から選ばれた10名ほどの、よく言えば専門家、ある意味、極端なお宅集団の面々で、自分の専門分野が目の前に現れると熱中するので、目の離せない子供たちのようでもありました。そんな、楽しい乗船者たちを乗せ、西ノ島に向かいましたが、到着時のその壮大な景観は息をのむばかりで、噴煙は一定の高度で風にたなびき絶えることなく、海面は変色海域がひろがり、海底地形の情報もないため、どれだけ近づけるかも手探り状態です。

調査は主に大型ドローンを使い、調査ロボットを、設定した調査ポイントに運び、そこで収集した地質や生物跡などの収集・撮影や昨年設置した調査機材の回収など、それぞれ分単位で予定が組まれています。しかし、毎回うまくいくわけもなく、毎朝どの調査を優先するか、にらみ合いの会議が開かれます。当然、本船側も天候、燃料や食料の状況から、それらの予定や方法が許容できるかも重要なファクターで、通常では考えられない安全限界を設定していても尚、その変更を検討せざるを得ない事もあります。

たとえば、一年間、気象データや海鳥の動静を記録した観測機器を回収するために、ドローンが接近できるギリギリの距離まで島に近づけたいと言うとき、その時の風や潮流の状況、噴火などの不測の事態への対処などを頭に入れながら、このポイントで調査開始してほしいとお願いしても「もう少し近づけませんか・・・」と涙目の研究者の顔を見ると心を鬼に出来ず、悩むこともしばしば。また、初期の噴火溶岩に付着する生物状況の調査では、許可された調査機材が小さすぎ（研究者も分かってはいたけれど、環境負荷というお役所判断で大型は不許可になった）強い海流の中で、何十回もトライしてうまくいかず、とうとう、その調査の割り当て時間を使い切り、絶望的になりましたが、泣きの涙で2時間だけ別の調査時間を貰い、我々本船の人間も必死になって、機材の改造、調査方法の再検討を行い、ようやく一回だけ成功したときは、皆、抱き合って喜びました。西ノ島の調査は、そんな冒険と言えるほど、ゼロからの工夫のオンパレードの過酷な調査でした。

最後に、ヨゼフ会らしく信仰や神様についてお話ししたいのですが、不信心ゆえにそのような信仰体験もなく、ひとつだけ皆が寝静まった真夜中、真っ黒に浮かび上がる西ノ島のむこうに満点の星々を見たとき、この宇宙の中で、人は点にも満たない小さな存在で、まばたきの時間にも満たない人生しかないのに、それでも神様は、私に何かを求めている、何をなすべきかを見ていると感じたとき、宇宙と神の奥深さに深く心を打たれたのでした。

懐かしい思い出



田口 利雄

2013年に山手教会で受洗し、主にミサでの朗読奉仕をさせて頂いております。初めの頃は、ミサでの聖堂案内、コロナ以前のバザーでのテント等の設営・後片付けなどもお手伝いさせて頂いておりました。しかしながら、

膝が少々悪くなったため体を使った作業は控えさせて頂いておられます。

朗読奉仕ですが、慣れないうちは自分の当番日用の「聖書と典礼」を持ち帰って家で練習し、つかえずに読み上げるので精一杯でしたが、典礼歴などが分かってくると、その日の朗読箇所の意味合いや前の週との繋がりが徐々に分かってくるようになりました。今は、毎日曜日のミサに賜り家に帰ると、「主日の聖書解説」（雨宮 慧著）を開いて復習しております。

さて、以前にもヨゼフ会便りで書かせて頂きましたが、私とカトリックとの出会いと言いますかはじめて接したのは、通園していた幼稚園であります。当時私は東京都築地の聖路加病院、ガーデンができるずっと昔です、路を挟んで向かいにある築地教会にある「聖ヨゼフ幼稚園」に通っておりました。（現在は少子化のため閉園しています）子供のころですから自分の意志でというよりは親の意向でした。そのことは今ではとても感謝しています。



園長先生は「石川先生」という方で、「生涯を教育に捧げられた方でした。」と後に母から聞いた記憶があります。

幼稚園では、聖書のお話しの時間がありました。大きなイーゼルに同じく大きくて年季が入って縁がボロボロだけれどとても立派な絵の描かれた本を立て掛けて、先生が「これは神様がお話ししているところです。」（たぶん、山上の垂訓）とか、「これは神様が何々なさっているところです。」と、聖書中の場面の説明をして下さいました。

幼稚園では、いつも皆がお行儀がいい訳ではありませんでした。たまにですがお仕置きとして、倉庫の中に閉じ込められてしまうこともありました。私も何度か倉庫行きになりました。そこには運動用のマットや跳び箱がしまっており、子供は逞しいもので、閉じ込められたことをいいことに、マットの上で飛び跳ねたり、跳び箱に登ったりして、キャッキヤと、はしゃいでいた思い出があります。

毎年行う運動会は、園庭が狭かったため、近くの浜離宮恩賜公園を借りて実施していました。

クリスマスのときは聖劇を演じました。イエス様の役は同じ年次、つまり同じ組のなかでいちばん利発な男の子がやりました。私は東方の三人の博士の一人でした。事前準備として、私ともう一人の博士役の子とそれぞれの母親とで、百貨店まで、頭に巻くターバンにする布とそれに付けるブローチを買いに行った思い出があります。何だか母親同士ととても盛り上がっていたように思います。今では感謝の気持ちでいっぱいです。

さて、最近知ったのですが、昨年から「通常は非公開の建築を特別に見学できるイベント」として、昨年5月に「東京建築祭」なるものが初開催され、今年も5月17日～5月25日まで実施されています。主催は東京建築祭実行委員会、実行委員長は建築史家の倉方俊輔という方だそうです。そこで特別公開される43の建築物のひとつに、築地教会が選ばれています。東京最古の教会であり、関口教会の前のカテドラルでした。聖堂は1999年に、東京都景観条例により歴史的建造物に選定され、さらに2001年に東京都中央区より文化財に選定された、とのこと。今回は時間の都合がつかなかったため、期間中に訪れることは叶いませんが、近いうちに久しぶりに足を運ぼうと思います。

最後にここ数年で新しく始めたことをふたつ程ご報告いたします。

ひとつ目は、最近エレキギターをいじるようになったことです。ギター自体は高校入学時に買ったのですが、ありがちなことで、すぐに挫折してしまい、

50年近くそのままになっていました。再開するにあたり、まず使用可能な状態か否か、近所のギターリペアショップに持ち込み診断して貰いました。音自体は出るのですが、全体のオーバーホール・全体パーツ分解サビとりクリーニング・ブリッジ分解クリーニング・各キャビティクリーニング・全体ポリッシュ・リヤーピックアップエスカッション割れ修理・フロントピックアップカバー緑錆除去・コントロールパーツ脱着洗浄グリスアップ・取り回し・ジャック修正・1F～3F サイドバイディング接着・指板エンドバイディング接着・ジャック修正といった作業が必要でした。それでも約50年ぶりに蘇ったギターですので愛着が湧いてきました。今はまだ特に曲を弾けるようになることは目指してはいません。短いフレーズを少しずつ練習しています。昔、ご高齢の方が指先の運動によく胡桃をカチャカチャ動かしていたように、そのくらいの楽な気持ちで楽しく遊んでいます。

ふたつ目ですが、一昨年から年に3～4度程、京都に1泊の小旅行を楽しんでいます。直近では4月の中旬、御室桜を楽しんできました。

歳と共にだんだん自分が本当に好きなこと、本当にやりたいことが見えてくるような気がします。

Ⅱ ヨゼフ会活動報告(4月～7月)

毎週、主日ミサの会場案内、福祉委員会と共同でミニカフェ等の奉仕活動を行いました。

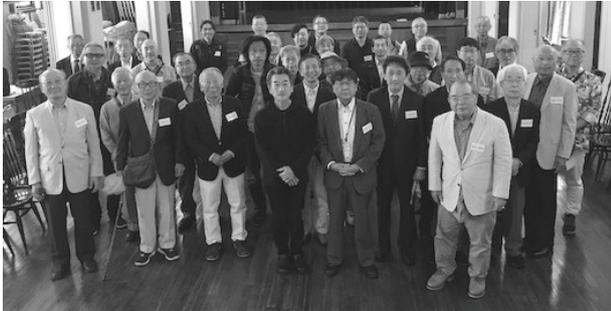
- ・ 4月19日(土)：復活徹夜祭の会場案内
- ・ 4月13日(日)～20日(日)：

聖週間の案内と奉仕

- ・ 4月27日(日)：2025年度ヨゼフ会総会

昨年に続き、教会ホールで「ヨゼフ会総会」を開催、鈴木真主任司祭の参加を得て、36名の会員が参加され、昨年の活動報告と今年度の活動予定を報告しました。総会終了後、会員間の旧交を温めるとともに新会員・新受洗者も参加し、教会での活動について情報・意見交換を行いました。

なお欠席者へは後日、総会資料を郵送か手渡ししておりますが、不達になる事例が増えております。住所や連絡先の変更があった場合はヨゼフ会幹事迄お知らせ頂けると幸いです。



・6月7日(土)：聖堂、教会ホールの大掃除

最近の高温化の影響を避けるため例年より1か月早めて6月に大掃除を行いました。

・7月20日(日)：聖書のかち合い

今年も恒例の聖書のかち合いを教会ホールで開催、内藤神父様指導の下、29名の参加があり多くの新しい気づきを得ることができました。



ヨゼフ会活動予定(8月～)

・8月15日(金)：聖母被昇天ミサ

・9月(予定)：避難訓練

・9月21日(日)：講演会

主催ロザリオ会、共催ヨゼフ会・福祉委員会で聖堂にて14時より講演会を予定しております。

・12月20日(土)：ヨゼフ会便り第57号発行予定

会員消息

・次の方が帰天されました。永遠の安息をお祈りいたします。

帰天日	洗礼名	氏名	享年
2025/06/12	パウロ	守木光夫様	94歳
2025/07/15	ルカ	宇野義也様	85歳

第56号発行延期のお詫び

本号は編集部の都合により予定より一か月半ほど発行が延期になり、寄稿者の方々読者の皆さんに深くお詫び申し上げます。次号は12月発行予定です。

編集後記

「生きる」今年には戦後80年。酷暑の日々が続いているが8月に入ると広島、長崎原爆投下の日がやってくる。1945年は第二次世界大戦末期3月の東京大空襲、3月から6月の沖縄戦を含め戦時中の経験をしていない私は記録だけしか確認方法がない。

広島、沖縄は20数年前、長崎は10数年前初めて旅をした。広島は多くの人々が飛び込んだと思われる川の街。長崎は坂と教会の港街であった。

茨城に居住していたからかもしれないが、父母は戦時中特に東京大空襲のことを多く語らなかった。

6月7日と戦中戦後を生きたヨゼフ会のお二人が帰天されました。守木光夫さん、コロナ禍でもズボンがずり落ちそうになり奥様から注意を受けながら健気にミサに与っていました。5年前ヨゼフ会便りに自ら戦中の話を寄稿いただき、長崎の「焼き場に立つ少年」の写真を黙って差し出されました。宇野義也さん、ワインがお好きで温厚の方でいつも家内の母親の健康を気遣ってくれました。以前飼った犬の医療費が私の何倍もかかると笑っていました。娘さんと一緒に復活祭でお会いしたのが最後でした。本当にお疲れさまでした。ゆっくりお休みください。

男はつらいよ 39 寅次郎物語(脚本山田洋次・朝間義隆)の1シーン。柴又駅に寅を見送りにきた妹さくらの子供満男「伯父さん」寅「なんだ」満男「人間てさ」寅「人間？人間どうした？」満男「人間何のために生きているのかなあ」寅「なんだお前難しいこと聞くなあ、ええ？」寅しばし考える。寅「うーん何ていうのかなあ、ほら、ああ生まれてきてよかったなって思うことが何べんかあるじゃない。そのために人間生きてんじゃねえのか」満男「ふーん」

古希もすぎ循環器疾患で初めて手術を経験していろいろと思いがめぐる。祈りのうちに(坪井暢)